

『鳳城聯句集』訓注稿（八）

楊 昆 鵬

本稿は版本『鳳城聯句集』所収聯句作品について、試みに読み下しを施し注釈を付けたものである。前稿（本誌第四二号、令和元年九月）の続きとして、全三十作のうち、第二十七と第二十八の二点をここに掲載する。

【凡例】

- ・ 五言の句冒頭に通し番号を付した。
- ・ 漢字の字体は原則として現在通行のものに統一した。
- ・ 訓点は底本のままにし、読み下しは原則として訓点に従うが、一部句意に基づき変更したものもある。なお、読み下しに適宜濁点を施した。
- ・ 明らかな誤字もそのまま翻刻し、語注において説明を加える。
- ・ 注は最小に止め、故事出典を示し、一部熟語の用例を示す。

侵第十二 慶長十七年十二月十一日

1 声^シ 亀^{カメ} 鶯^ウ 棘^ス レ口^ニ 声^シ 亀^{カメ} 鶯^ウ レ口^ニ 棘^ス

2 残 ^レ 臘 ^ニ 待 ^ツ 春 ^ニ 吟 ^ヲ	残臘 春吟を待つ	節
3 機 ^キ 駿 ^シ 蠶 ^ニ 根 ^ツ 道 ^ニ	機駿にして蠶道に根づく	
4 平 ^ニ 居 ^ニ 絶 ^ス 浪 ^ニ 心 ^ヲ	平居 浪心を絶す	雲
5 雪 ^ニ 時 ^ニ 山 ^ニ 玉 ^ニ 立 ^ニ	雪の時 山は玉立	宮
6 巳 ^ニ 節 ^ニ 渚 ^ニ 杯 ^ニ 深 ^ニ	巳 ^④ 節 渚は杯深	澗
7 荔 ^ハ 熟 ^ス 洪 ^ニ 閑 ^ニ 味 ^ニ	荔は熟す 洪 ^⑤ の閑味	御
8 叢 ^ハ 興 ^ス 海 ^ニ 旧 ^ニ 箴 ^ニ	叢は興る 海 ^⑥ の旧箴	竹
9 鐘 ^ニ 鳴 ^ス 諳 ^ニ 遠 ^ニ 寺 ^ヲ	鐘鳴きて遠寺を諳んず	重
10 書 ^ニ 満 ^ツ 惜 ^ム 分 ^ニ 陰 ^ヲ	書満ちて分陰 ^⑦ を惜しむ	溪

（1）「亀」は軼にも通じ、皮膚の凍傷によるあかぎれをいう。

声との組み合わせは未見であるが、ここは寒さで鶯の聲がかす(翳)んでしまふ喩えか。また「棘口」の古い使用例も未見。

(2) 「機」は時機、ここで駿馬と喩えているのは、時機が逼迫することか。釈洪徳「臨機弁神駿、正要略玄黄」(次韻黄元明)は近い。また「鼃」はここでは櫃に通じ、道に根付いて動かないという。

(3) 平常。阮籍「念我平居時、郁然思妖姬」(詠懷詩第五十一)など。「浪心」は不羈なる心。

(4) 上巳。三月三日。清流に酒杯を浮かべ、詩歌を作る曲水の宴をいう。

(5) 中国禪宗洪州宗。洪州は江西省にあり、荔枝と何らかの関連性があったか。

(6) 中国の禪僧の百丈懷海、洪州宗創設者馬祖道一の法嗣である。「旧箴」というのは、百丈懷海が制定した「叢林清規」を指し、また「叢興」もそれに因む。

(7) 僅かな光陰。ここでは満ちあふれる書物を読むべく、短い時間も大切にするという。劉克莊「年少分陰且惜取、老夫不覺已頭童」(和陳生投贈二首、其二)。

11 玃^ハ折^ル風簾^ハ蝶^ハ 玃は折る 風簾の蝶 勝

12 目耕^ス天^ス緑^シ蟬^シ 目耕す 天緑の蟬 緒

13 菊凋^シ星欲^ス曙^ト 菊凋んで星曙けんと欲す 雲

14 簑落^ッ月昇^ル岑^ニ 簑落ちて月岑に昇る 宮

15 窓^ニ小^シ幾^ク余^ノ景^シ 窓小にして幾ばく余景ぞ 竹

16 日^ハ三^ニ僅^ニ苦^ム霖^ニ 日は三 僅かに霖に苦しむ 御

17 託^ニ鶉^ニ疑^レ向^{カト}蜀^ニ 鶉に託して蜀に向かふかと疑ふ 竹

18 憑^ニ鯉^ニ俛^ニ通^ス潯^ニ 鯉に憑りて 俛く潯に通ず 勝

19 松響^テ訝^ル潮^ノ怒^ル 松響きて潮の怒るかと訝る 溪

20 草荒^テ懶^ニ徑^ニ尋^{スル} 草荒れて徑尋ぬるに懶し 重

(8) 翼。折翼は挫折に遭うこと、また陶侃「天門折翼」の故事から自らを戒める意味で使われる。

(9) 長雨が降り続け、月に三日間しか晴れない。楊万里「兩月春霖三日晴、久寒初暖稍秧青」(農家歡)、陸游「百年更把幾杯酒、一月元無三日晴」(家園小酌二首、其一)。

(10) ただし、その場合「僅かに」の使い方は不自然。元稹「憑仗鯉魚將遠信、雁回時節到揚州」など、鯉に手紙を届けてもらうという。「潯」は潯陽。

21 建^ハ安^ハ韓^カ風^ハ致^ハ 建安は韓が風致 御

22 雲^ハ夢^ハ信^ハ生^ハ擒^ハ 雲夢は信の生擒 澗

23 家^ハ為^メ盤^{タノ}遊^{シム}忘^{カカリ} 家は遊^カりを盤^{タノ}しむが為^タに忘^{ボウ}す

24 霧^ハ依^テ受^ル瘴^ニ侵^ス 霧は瘴^カを受^ケくるに依^ヨりて侵^シす

25 借^テ涼^ヲ雖^モ廢^ニ扇^ヲ 涼を借^カりて廢^ス扇^ヲと雖^モ

26 坐^テ冷^ニ奈^レ單^ニ衾^ニ 冷に坐^カりて單^イ衾^{カン}を奈^カせん

27 令^ク色^ヲ双^ニ巢^ニ翡^ニ 色を令^ヨくす 巢^ナに双^フ翡^ヒ

28 斂^ム翎^ヲ拭^フ栖^ヲ禽^ヲ 翎を斂^ムむ 栖^セを拭^ス禽^カ

29 緑^ニ濃^ニ添^ニ牧^ヲ恨^ヲ 緑濃^ニやかにして牧^カが恨^ミみを添^ソふ

30 清^ニ独^リ慙^ニ原^ニ沈^ニ 清独^ニり原^カが沈^ムを慙^ハれむ

(11) 漢末から魏にかけて曹操父子と建安七子の詩文に見られる風格。古文復興運動を提唱した韓愈の詩文に見られるという。前句の荒廢した情景を建安風骨の衰退と捉えた。

(12) 韓信が雲夢沢で劉邦に捕らえられた。『史記・淮陰侯列伝』「漢六年、人有上書告楚王信反。高帝以陳平計、天子巡狩会諸侯、南方有雲夢。發使告諸侯、会陳、吾將遊雲夢。実欲襲信、信弗知。(中略)上令武士縛信載後車」。

(13) 遊樂。張衡「極盤遊之至樂、雖日夕而忘劬」(埤田賦)。

(14) 番いになって巢くう翡翠という鳥。李白「中巢双翡翠、上宿紫鴛鴦」(古意)。

(15) 杜牧のことか。「緑濃」は春が深まる意味で、宋末元初の詩人俞德隣には「多病樂天悲老近、三生杜牧恨春深」(泊閭橋有懷)という詩句があり、この句と趣旨を同じくするが、受容は定かではない。

31 横^ニ水^ニ梅^ノ龍^ノ種^ニ 水に横^ヘたふ 梅の龍種

32 帰^ニ空^ニ蔗^ノ鶴^ノ林^ニ 空に帰^ルす 蔗の鶴林

33 个^ノ僧^ノ雲^ニ見^ル眺^ニ 个の僧 雲に眺^ムしんぜらる

34 隻^ノ妾^ノ夜^ニ争^ニ禁^ニ 隻妾 夜は争^カでか禁^ヘん

35 艷^ニ簡^ニ尽^ス言^ニ美^ニ 艷簡 言の美なるを尽^スくす

36 粧^ニ匳^ニ漸^ニ孔^ノ王^ノ 粧匳 孔王^ノいなるを漸^ズく

37 煙^ニ間^ニ容^ル髮^ヲ柳^ニ 煙間 髮を容^ムるは柳

38 榻^ニ下^ニ嗜^ム眠^ヲ藏^ニ 榻下 眠を嗜^ム藏^ス

39 蚕^ノ晚^ニ懶^ニ村^ノ婦^ニ 蚕晚^ニくして村婦懶^シ

40 鷄^ノ寒^ニ効^フ野^ノ暗^ニ 鷄寒^ニくして野暗^ニに効^ス

(16) 林逋「疎影横斜水清浅、暗香浮动月黄昏」(山園小梅)。

横たわる梅の枝は龍のごとしと范成大『梅譜』にある。

- (17) 「鶴林」は仏寺の意、ここでは鶴の居る蔗林か。鶴は前句林通「妻梅子鶴」からの連想。

- (18) どうして堪え得るか、いや出来ない。白居易「敢辞課拙酬高韻、一勺爭禁万頃陂」(酬裴相公題興化小池見招長句)。

- (19) 堯の時の奸佞。「ハタ」という送り仮名は不明。『尚書』に「何畏乎巧言令色孔壬」とある。黄庭堅「厭看孔壬面、醜石反成妍」(玉芝園)。

- (20) 草の名、やまあい。『爾雅・稊草』に「寒漿」とあり、一方『聚分韻略』に「葳 蔣」とある。ここで擬人化されているが、「葳」を名前を含む人物は孔子の弟子公西葳を除き、他はほとんど知られない。押韻するためか。熟語としての使用例は未見。ただし蘇軾「市人争誇鬪巧智、野人暗唾遭欺謾」(和子由鬻市)に基づく造語の可能性はある。蘇軾詩題の「蠶」は「蚕」の異体字。蚕を詠む前句からの連想か、興味深い。

- 41 湯婆何足嫁^{スルニ} 湯婆 何ぞ嫁するに足らん 溪

- 42 社友毎欣臨^{スルヲ} 社友 毎に臨するを欣ぶ 雲

- 43 新洛移兜率^ヲ 新洛 兜率を移す 澗

- 44 有莘現二世音^ヲ 有莘 世音を現す 御

- 45 波狂船追北^{ルヲ} 波狂して船は北ぐるを追ふ 御

- 46 路查轍司南^ヲ 路查にして轍は司南す 澗

- 47 慕乞越坡鵲^ヲ 越を乞う坡を慕ふは鵲 雲

- 48 全亡楚季篤^{スルハスルヲ} 楚を亡する季を全うするは篤 重

- 49 倦樵傾雨笠^ヲ 倦樵 雨笠を傾く 宮

- 50 深隱翫泉琴^ヲ 深隱 泉琴を翫ぶ 竹

- (22) 「新洛」は新しい都か、後考を待つ。兜率天を移したかと思わせる壮麗さをいう。

- (23) 古代の国。周文王の妻の有莘国の出身で、武王など十人兄弟を産んだ。「世音」とは観世音菩薩、賢母の喩えか。

- (24) 南を示す計器、また司南車のこと。劉敞「時無司南鵲、自比連城珍」(以石為玉)。

- (25) 蘇軾が越州への赴任を希望した。「我頃三章乞越州、欲尋万壑看交流」(次韻滕大夫三首、雪浪石、其二)。「鵲」は南方の鳥。

- (26) 漢高祖劉邦の字は季、項羽を滅ぼした。「篤」は戴勝鳥。

- 51 鷗曲愕牙曠^ヲ 鷗曲 牙曠を愕かす 重

- 52 鳥情感悶參^ヲ 鳥情 悶參を感じしむ 雲

53 笑微^{ニメ}知^チ観^{カン}一^一 潤 笑微にして観一を知る

54 輕^レ畢^ヘ合^ア禁^ン十^シ 竹 輕畢へて禁十を合ふ

55 羯鼓^{カコ}は花^ハの塗^ニ毒^{ドク} 勝 羯鼓は花の塗毒

56 伽藍^{カラン}樹^{ジュ}布^フ金^{キン} 潤 伽藍 樹の布金

57 復^{フク}圭^{ケイ}盈^{エイ}地^チ雹^{ハク} 竹 圭を復さんとす 地に盈つる雹

58 漲^{ショウ}硯^{イン}倒^{タウ}溟^{メイ} 溪 硯に漲る 溟を倒しににする溟

59 谷^コ是^シ宋^{ソウ}工^{コウ}部^ブ 重 谷は是れ 宋の工部

60 寂^{シヤク}其^キ仰^{オウ}祖^ソ欽^{キン} 潤 寂は其の仰の祖欽

(27) 伯牙と師曠。伯牙は琴を善くし、師曠は善く音を弁ずという。白居易「願求牙曠正華音、不令夷夏相交侵」(新

樂府法曲美列聖正華声也)。この二人さえも驚くほど、驚の鳴き声が美しいという。

(28) 関子騫と曾参。ともに孔子の弟子で、孝行で知られる。

『二十四孝』に関損は「蘆衣順母」、曾参は「嚙指痛心」の主人公として登場する。鳥情とは鳥が老いた親鳥に餌

を運び与え、いわゆる反哺をすること。

(29) 不明、後考を待つ。

(30) 羯鼓の音で柳や杏が芽生え花を咲かせた故事。『景德伝

灯録・卷十六』「吾教意猶如塗毒鼓、擊一声遠近聞者皆喪」(鄂州巖頭全齡禪師)。

(31) 復職の意。圭は美玉で作られるため、ここでは雹の比喩。

(32) 「落」は雨による溜まり水。ここで硯に墨汁がいつぱいに漲ることは、海をひっくり返すように大きな水溜りができたと同じだ、という意か。

(33) 唐代禪僧の仰山慧寂。南宋の禪僧雪岩祖欽は仰山禪寺に住した。

61 柿^ヘ霜^{シヤウ}林^{リン}七^{シチ}絶^{ケツ} 御 柿は霜林の七絶

62 茅^{マウ}巷^{コウ}杏^{コウ}孤^コ斟^{キン} 潤 茅は巷杏の孤斟

63 晤^ブ語^ゴ吾^ニ無^ニ憾^シ 重 晤語 吾に憾無し

64 处^コ羞^{シウ}神^{シン}所^{ショ}歆^{キン} 潤 处羞 神の歆くる所

65 龜^キ趺^ト碑^ヒ幾^キ歳^{サイ} 雲 龜趺 碑は幾歳ぞ

66 駒^コ陳^{チン}古^コ猶^{ユウ}今^{キン} 竹 駒陳 古猶今のごとし

67 空^{クウ}在^{ライ}死^シ名^ニ墨^シ 勝 空しく在り 名に死する墨

68 罕^{カン}逢^フ愈^ユ疾^{シツ}琳^{リン} 雲 罕に逢ふ 疾を愈す琳

69 窮^レ儒^文 引^レ睡^ヲ 窮儒 文は睡を引く 宮

70 登^レ女^席 纏^レ婦^ニ 登女 席は婦に纏ふ 澗

(34) 茅柴酒、粗末な酒。蘇軾「幾思压茅柴、禁網日夜急」(岐亭)。「巷杏」は杜牧「借問酒家何処有、牧童遙指杏花村」(清明)から、杏が咲く村里の酒屋を意味する。五山に用例が多い。

(35) 語り合う。「詩経・東門之池」「彼美淑姬、可与晤語」。

(36) 一応「処」とするが、字形に疑問が残る。「処羞」は意を成さず、熟語の用例も見られない。他の可能性として、度・庶・薦の三つが挙げられる。度は字形が最も近いが、度羞の使用例はない。庶と薦とは字形こそやや距離があるものの、庶羞は多くの美味、薦羞は薦められた美味。王十朋「茲地有神宇、人人来薦羞」(十八坊詩、介福)。「神韻」は、神が楽しむこと。「神歆享、咸悦康」(晋鼓吹曲二十二首、其十三)。

(37) 石碑を背負う亀の形の台座。蘇軾「亀跌入座螭隱壁、空齋昼静閑登登」(孫莘老求墨妙亭詩)。

(38) 「墨」は人名。義として周粟を食さず餓死した墨胎允伯夷、墨胎智叔齊の兄弟を指すか。

(39) 魏の陳琳、曹操配下の書記官。『三国志・陳琳伝』「琳作諸書及檄、草成呈太祖。太祖先苦頭風、是日疾発、臥読琳所作、翕然而起曰、此癒我病。数加厚賜」。

(40) 摩登伽女。鉢吉帝、摩登伽種の姪女。幻術を以て阿難を惑わせた(仏学大辞典)。

71 愛^レ愛^鴛 相^並 愛愛 鴛は相並ぶ 雲

72 暗^暗 蟀^似 紺^ニ 暗暗 蟀は紺に似たり 御

73 鬢^茎 黄^雜 白^ヲ 鬢茎 黄は白を雜じゆ 溪

74 舌^本 暫^{シラ、} 謳^{クラ、ヲ} 黯^ヲ 舌本 暫らかは黯らかを謳ふ 勝

75 壤^{ハ、} 醉^農 珊^枕 壤は醉農の珊枕 雲

76 霞^{ハ、} 辱^顔 玳^寶 霞は辱顔の玳寶 澗

77 詩^肩 何^耐 重^{キニ} 詩肩 何ぞ重きに耐えん 御

78 燭^淚 孰^{カ、} 勞^{セン} 淋^ニ 燭淚 孰れか淋しくに勞せん 竹

79 挽^{ハ、} 石^{ハ、} 弓^{ハ、} 臥^ニ 石八を挽くは弓臥 勝

80 愧^{ハ、} 金^{ハ、} 両^{ハ、} 白^{ハ、} 任^ニ 金両を愧ずるは白任 澗

(41) 口のきけない様。蟋蟀を形容する例は未見。また万里集九の『会海対類量字』にも未収録。

(42) 舌。黃庭堅「一甌資舌本、吾欲問三車」(寄新茶与南禅師)。前句の黄と白という字からの連想か。

(43) 山。蘇軾「我行無遲速、撰衣步辱顔」(峽山寺)。「霞」は山に飾る玳瑁の寶、山を彩ること。この霞はかすみ

ではなく、朝焼け夕焼けか。

- (44) 詩人の瘦せた肩。前句の山からの連想。白玉蟾「山似詩肩聳、江如酒量寬」(晚吟)。類似の表現として「吟肩」がある。

- (45) 黃庭堅「挽弓石八不好武、讀書臥看三峰雲」(次韻答曹子方雜言)。

- (46) 黃庭堅「自守藩籬小、猶能井臼任」(次韻德孺感興二首、其一)。

- 81 苔^ハ氈^カ予^カ屋^ノ什

竹

- 82 棕^ト弘^コ祖^ソ門^ノ鐔

雲

- 83 甘^{カン}鉄^{テツ}飯^{ハン}禪^{ゼン}悅

溪

- 84 拈^{ニル}香^カ材^ハ賀^カ忱^{チン}

御

- 85 高^{コウ}狎^ハ鴻^{コウ}志^シ雀

竹

- 86 珠^{シュ}絶^{セツ}電^{デン}行^{コウ}駸^{フン}

重

- 87 翹^ル足^{ソク}不^フ前^{ゼン}履

澗

- 88 療^{リョウ}膏^{コウ}難^{ナン}下^カ針

勝

- 89 培^ハ仙^{セン}苗^{ボウ}菓^カ畝

雲

- 90 添^{ソフ}稚^シ竹^{チク}蕭^{セウ}森

御

- (47) 鉄製の鉢から。前句に続き、禅僧の日常を詠む。白居易「云昔迦葉仏、此地坐涅槃。至今鉢鉢在、当底手跡穿」(遊悟真寺詩)。

- (48) 祝賀の誠意。漢詩文に用例が稀である。

- (49) 「珠絶」は熟語の用例が未見。「珠」は珠履の略か、珠で飾られた履、またそれを穿いた門客。ここは門客が絶えたこと。李益「珠履久行絶、玉房重未開」(賦応門照緑苔)。

- (50) 膏肓。前句に詠まれた、足を上げて進まない様子を重病と捉えた。

- (51) 草木の生い茂るさま。張協「溪谿無人跡、荒楚郁蕭森」(文選「雜詩十九首、其九」)。

- 91 鳥^カ狎^ハ可^カ人^ニ卓^ニ

竹

- 92 鳩^{コウ}中^ニ殺^ス我^ガ琛^ニ

雲

- 93 拾^{シツ}枯^コ童^{ドウ}煮^ル茗^{メイ}

宮

- 94 約^{ヤク}寂^{シツ}旅^{リョ}聴^{テイ}礎^ソ

重

- 95 嘗^{シヤウ}險^{ケン}鞋^ケ穿^ス結

溪

- 96 祭^{サエ}廟^{ミョウ}簾^{レン}腥^{セイ}燂^{セン}

御

97 窄^レ天^テ堯^ヲ露^ヲ甕^ニ 天を窄みて堯の露甕⁽⁵⁶⁾

勝

98 記^ス閣^ニ勃^カ江^カ襟^ニ 閣に記す 勃が江襟

緒

99 恩^ニ沢^ニ勝^{レリ}瀛^ノ大^{ナルニ} 恩沢 瀛の大なるに勝れり

澗

100 治^ニ邦^ニ致^ス代^ノ諶^{トヲ} 治邦 代の諶を致す

御

(52) 意に適う。宋方岳「竹君自可人、清影飛度牆」(八月十
四夜対月)。

(53) 「琛」は珍宝、句意にかかわる典拠は不明。押韻するた
めの用字か。

(54) 險阻を経験すること。「鞋」との取り合わせは、漢詩に
は珍しいが、和漢聯句には見られる。「潮激舟寧泊／路
岨鞋備嘗」(元和八年三月十五日和漢百韻)など。「穿結」
は破れて結ばれること。陶淵明「短褐穿結、瓢簞屢空」
(五柳先生伝)。

(55) 熟語としての用例は未見。「燂」は爛と同じ、熱湯で煮
る調理法。「三献爛、一献熟」(礼記・郊犠牲)。

(56) 熟語としての用例は未見。露の甕。「堯露」は例えば武
元衡「漢代衣冠盛、堯年雨露多」(送馮諫議赴河北宣慰)
のように、治世の恵みをいう。

(57) 「諶」はまこと。『詩経・蕩之什』「天生烝民、其命匪諶」。

1 雪^ノ内^ノ牡^ノ丹^ノ院^ニ 雪内の牡丹院⁽¹⁾

2 添^レ紅^ニ閨^ノ十三^ニ 紅を添ひて閨の十三⁽²⁾

3 炉^ノ中^ノ螺^ノ甲^ノ炷^ニ 炉中の螺甲炷⁽³⁾

4 裊^レ縷^ヲ雨^ノ同^ノ参^ニ 縷を裊して雨は同参

5 蓬^ノ入^ル安^ニ眠^ノ枕^ニ 蓬は安眠の枕に入る

6 楚^ハ愁^ニ性^ニ冷^ノ柑^ヲ 楚は性冷の柑を愁ふ

7 氷^ヲ衾^ヲ霜^ヲ夜^ノ懶^シ 衾を氷らして霜夜懶し

8 照^ル鏡^ヲ暮^ノ年^ノ慚^ツ 鏡を照らして暮年を慚づ

9 彭^ノ八^ノ山^ノ何^ッ改^{メン} 彭八 山は何ぞ改めん

10 孔^ノ千^ノ道^ヲ以^テ談^ス 孔千 道は以て談ず

(1) 秋冬に咲く牡丹の品種か。策彦周良に「雪内牡丹」と題
して「半恨東風半北風、層層襯雪牡丹紅」と詠む。

(2) 閨月があると、一年は十三ヶ月になるので「閨十三」と
いう。宜竹「賦十三紅牡丹」詩に「子細数年尤感情、今
年有閨十三生。牡丹白髪若相似、一月猶添雪成茎」とあ
る。

(3) 香料か。黄庭堅「石蜜化螺甲、榧楂煮水沈」(賈天錫惠宝薰乞詩多以兵衛森画戟燕寝凝清香十字作詩報之、其三)。

(4) 彭祖が八百年も長生きしたことをいう。蘇軾「八百要有終、彭祖非永年」(問淵明)。

11 德輝麟在_レ炭 德輝 麟は炭に在り

12 妖艶翡成_ス簪_ヲ 妖艶 翡は簪を成す

13 棠_ハ学_ニ醉_レ妃_ノ媚_ヲ 棠は醉妃の媚たるを学ぶ

14 荔_ハ余_ニ老_ス素_ヲ甘_ニ 荔は老素の甘きを余す

15 世_ト交_ニ雲_ノ易_ニ變_シ 世交 雲は変じ易し

16 閨_ト怨_ニ曉_ノ難_ニ堪_ヘ 閨怨 曉は堪へ難し

17 寄_ニ数_ノ行_ノ啼_ノ雁_一 数行の啼を寄するは雁

18 施_ハ三_ニ起_ノ巧_ノ蚕_一 三起の巧みを施すは蚕

19 簾_ト波_ノ盆_ヲ手_ヲ竹 簾波 手を盆す竹

20 輪_ト困_ノ冠_ノ宗_ニ栴_一 輪困 宗に冠たる栴

(5) 炭を獸の形に作り酒を温めたという羊琇的故事(晋書・外戚伝)に、治世に麒麟が現れると取り合わせたか。蘇軾「白灰如積雪、中有紅麒麟」(贈月長老)。蘇過「獸炭麒麟紅、銀瓶黃封揭」(小雪)など。

(6) 熟語の用例は未見。前句の「醉妃」と対偶を作るため、人名と思われるが不明、後考を待つ。

(7) 蚕が孵化することを「起」といい、「三起」は年に三度孵化すること。陸游「壘麦行可穫、吳蚕亦三起」(甲子日晴)。

(8) 簾の揺れる動きが波打つように見えること。李商隱「玉佩呵光銅照香、簾波日暮衝斜面」(燒香曲)。また「盆手」は盆水の中に手を入れて繭の糸緒を探すこと。范成大「桑姑盆手交相賀、綿繭無多糸繭多」(四時田園雜興六十首、其二十八)。

(9) 大きい様。韓愈「窮途致感激、肝胆還輪困」(贈別元九八協律六首、第四)。宋詩に多用される。

21 残_ト卷_ノ追_フ西_ニ月_一 残卷 西月を追ふ

22 扁_ト舟_ノ遶_ル北_ニ潭_一 扁舟 北潭を遶る

23 重_レ湖_ヲ輕_ス越_ス蟲_一 湖を重くして越を軽くする蟲

24 寿_ス日_ヲ化_ル胡_ノ聃_一 日を寿す 化胡の聃

25 松_ニ有_リ猶_ノ龍_ノ瑞_一 松に猶龍の瑞有り

26 蔗^ハ禁^ニ浮^ス蟻^{アリ}酣^ム 節 蔗は浮蟻の酣を禁ず

27 惡^ム修^ス羅^ヲ猛^ニ妹^イ 澗 修羅の猛を惡む妹

28 呈^{スル}妙^ニ德^ヲ祥^ニ男^ヲ 雲 妙德の祥を呈する男

29 峰^ハ按^ニ吐^ク虹^ヲ劍^ヲ 竹 峰は虹を吐く劍を按ず

30 煙^ハ盈^ニ沈^ス水^ノ籃^ニ 御 煙は沈水の籃に盈つ

(10) 王勃「竹晦南汀色、荷翻北潭影」(山亭夜宴)、蘇轍「羨君不出心自如、北潭秋水多芙蓉」(寄孫朴)。

(11) 老子が函谷関を出て西域を遊歴し教化したことをいう。偽経とされる『老子化胡経』がある。蘇軾「老聃西入胡、孔子東歸魯」(癸未生日)。

(12) 老子またその道の深奥をいう。『史記・老子韓非列伝』「吾今日見老子、其猶龍邪」。唐李中「漆園化蝶名空在、柱史猶龍去不帰」(経古観有感)。

(13) 阿修羅、戦う神。「妹」との関連は不明。

(14) 蘇軾「知君不向窮愁老、尚有清詩氣吐虹」(次韻張琬)など、気概が高邁なさまをいう。峰が劍を按ずとは不明。前句を承けて、「峰」は人名か。例えば雪峰義存。但し事跡については後考を待つ。

(15) 沈水香、沈香。黄庭堅「百煉香螺沈水、宝薰近出江南」(有惠江南帳中香者戲答六言、其二)。籃との取り合わせは不明。

31 焉^ン瘦^シ風^ノ外^ノ麝^ヲ 節 焉んぞ瘦さん 風外の麝

32 敢^テ殿^ル路^ノ難^ハ驂^ヲ 澗 敢えて殿る 路難の驂

33 履^シ信^ヲ步^ヲ何^ノ失^ハ 御 信を履きて歩は何ぞ失ふ

34 鍾^{メテ}情^ヲ思^ヒ愈^ク覃^ニ 召 情を鍾めて思ひ愈いよ覃し

35 氈^ニ車^ヲ昭^ニ載^ス恨^ヲ 雲 氈車 昭は恨を載す

36 某^ノ局^ヲ李^ハ多^シ慙^ニ 御 某局 李は慙多し

37 詩^ハ淬^テ詞^ヲ鋒^ヲ戰^フ 宮 詩は詞鋒を淬ぎて戦ふ

38 勝^ハ携^テ吟^ニ杖^ヲ探^ル 廣 勝は吟杖を携はりて探る

39 隣^ニ鷗^ヲ雖^モ置^ト散^ニ 良 鷗を隣む 散に置くと雖も

40 塵^ニ蝶^ヲ耐^リ聴^ニ雛^ニ 雲 蝶を塵にして雛に聴くに耐えたり

(16) 陶淵明「夫履信思順、生人之善行。抱朴守靜、君子之篤素」(感士不遇賦並序)。皎然「後輩驚失步、前修敢爭衡」(読張曲江集)のように、躊躇うことを「失歩」という。ここは信用を堅く守る以上、躊躇うことはあるまいという。

(17) 「覃」は深い。黄庭堅「歲晚草玄経、覃思写天維」(次韻

奉送公定。

(18) 王昭君。王安石「明妃初嫁与胡兒、氍毹百兩皆胡姬」(明妃曲)。

(19) 李愬子。歐陽脩「太宗時有待詔賈玄、以棋供奉、号為国手、爾來数十年未有繼者。近時有李愬子者、頗為人所称、云举世無敵手。然其人状貌昏濁、垢穢不可近」(文忠集「埽田錄」)。

(20) 「置散」とは閑職を任じられること。韓愈「動而得謗、名亦随之。投閑置散、乃分之宜」(古文真宝「進学解」)。「隣陽」は「鵠と隣す」とも読めるが、「隣む」の誤写か。

(21) 鶉。蘇軾「振翮遊霄漢、無心顧雀鷁」(入峽)、「鷁」は「雛」の異体字。

41 蒨⁽²⁾ 苴 梨 僧 様

蒨⁽²⁾ 苴 梨は僧様

召

42 櫟 樟 芋 跋 曇

櫟 樟 芋跋曇⁽²⁾

澗

43 札 園 成 趣 少

札園⁽²⁾ 趣を成すこと少なり

御

44 隠 戸 ト 閑 弁

隠戸 閑をトして弁^{おほ}ふ

良

45 友 ト ス 破 天 公 二 軾

破天公を友とするは軾⁽²⁾

雲

46 乗 ス ル ハ 長 齡 傳 ニ 耽

長齡傳に乗ずるは耽⁽²⁾

節

47 仙 棲 桃 甬 岸

仙棲 桃は岸を甬⁽²⁾む

竹

48 梵 宇 蘇 埋 龜

梵宇 蘇は龜を埋む

廣

49 講 後 鐘 一 声 唾

講後 鐘声は唾す

宮

50 粧 新 玉 髮 髻

粧新にして玉髮は髻たり

節

(22) 粗末でだらしないさま。冬第二27に既出。

(23) 「芋跋曇」は不明。「櫟樟」は豫樟に同じか、国家を支える人材。

(24) 札を修める場所。司馬相如「悲伐檀、樂樂胥。修容乎札園、翱翔乎書園」(文選「上林賦」)。

(25) 海南の姜唐佐が蘇軾に教わり、「蒼海何嘗斷地脈、白袍端合破天荒」(送姜唐佐)と詩を送られた。

(26) 仙人蘇耽のことか。

(27) さしはさむ。『史記・司馬相如列伝』「赤瑕駁犖、雜甬其間」とあるが、こゝでは挟むの意。

51 妾 栽 相 思 草

妾は相思草を栽ふ

御

52 母 苦 羯 羅 藍

母は羯羅藍に苦しむ⁽²⁾

澗

53 生 毓 字 一 微 鳥

生は毓す 字微する鳥⁽²⁾

良

54 介 勞 曝 戲 蚶

介は勞す 曝し戲る蚶⁽³⁾

雲

55 心^一珠^ニ寧^レ飯^ニ琢^ヲ 心珠⁽³¹⁾ 寧ろ琢を飯らんや 節

56 雅^一席^ニ好^シ知^ル牼^ヲ 雅席好^シ 牼⁽³⁶⁾しみを知る 御

57 楓^ハ有^ニ花^ヲ天^ノ下^ヲ 楓は花の天下を有つ 廣

58 棉^ハ伝^ニ樵^ノ嶺^ニ南^ニ 棉⁽³²⁾は樵の嶺南に伝ふ 澗

59 湊^ハ春^ヲ開^ニ泛^ス宅^ヲ 湊⁽³³⁾春きて泛宅を開す 雲

60 霧^ニ簇^テ滴^ツ遙^ニ風^ヲ 霧簇りて遙風を滴^オつ 召

(28) 父母が交合し、受精すること。

(29) 「字」は子を育てること、「微」は交尾すること。ふりがな「コヲオモヒシ」と「ツルミスル」はその意味を和らげた読み。『史記・五帝本紀』「日中、星鳥、以殷中春。其民析、鳥獸字微」。また「毓」は育に同じ。

(30) 黃庭堅「土弊禾黍惡、水煩鱗介勞」(送劉士彥赴福建轉運判官)。

(31) 仏語。衆生が本来持つ明淨な心性。梁簡文帝「心珠可瑩、智流方普、永變身田、長無沙匱」(芸文類聚・內典「釈迦文仏像銘」)。

(32) 木綿。前句の楓から赤い花を咲かせる高木を連想した。『太平御覽』「広州記曰、枝似桐枝、葉似胡桃而稍大。出交廣二州」、廣志曰、木綿樹赤華、為房甚繁。『塵添瑤囊鈔』「木綿事」に「唐木綿云木アリ」とも見える。

(33) 舟を家宅とすること。蘇軾「清遠聊為泛宅行、一夢分明墮鄉井」(清遠舟中寄耘老)。湊春は、韓愈「遂凌大江極東陬、洪濤春天禹穴幽」(劉生詩) など、荒波が打つこと。

61 林^ニ罽^ノ子^ヲ 蛻^ニ鹿^ノ 林罽きて子蛻鹿⁽³⁴⁾ 御

62 藏^ニ收^ム多^ク貝^ノ蟬^ヲ 藏には収む 多貝の蟬⁽³⁵⁾ 澗

63 伎^ハ閑^ニ辭^ス藥^ヲ濟^ス 伎は閑なり 藥を辭する濟⁽³⁶⁾ 雲

64 力^ハ竭^ス念^ス觀^ス鐔^ヲ 力は竭す 觀を念ずる鐔⁽³⁷⁾ 良

65 糸^ハ寸^ニ既^ニ童^ノ柳^ヲ 糸は寸 既に童ろにする柳⁽³⁸⁾ 節

66 堦^ハ高^ク稱^ス意^ヲ薄^ヲ 堦は高くして意に称ふ薄⁽³⁹⁾ 御

67 礎^ハ從^ニ吳^ノ破^レ漢^ヲ 礎は吳の破れてより漢⁽⁴⁰⁾ 竹

68 酒^ハ魯^ノ醕^ニ易^ス 酒は魯の醕に易る⁽⁴¹⁾ 澗

69 白^ニ圍^ヲ綴^ル斑^ヲ鷺^ヲ 白圍 斑を綴る鷺⁽⁴²⁾ 雲

70 電^ハ行^ニ汗^ノ血^ヲ驪^ヲ 電行 汗血の驪⁽⁴³⁾ 廣

(34) 首を高く伸ばす様子。『文選・魯靈光殿賦』「白鹿子蛻於

樽櫨、蟠螭宛転而承楣」。

(35) 二文字目にある平声の「収」と重ならないよう、根多を

「多根」と調整したか。根多は先第一50に既出。

(36) 臨濟慧照義玄が「三度発問、三度被打」(臨濟録)のた

め、師黄蘗希運を辞した故事。「伎」は伎倆。

(37) 『莊子・胠篋篇』「唇竭則齒寒、魯酒薄而邯鄲圍」。魯酒

の故事は、歌第五40に既出。

(38) 「圍」は前句からの連想。「白圍」の用例は未見、囲碁の

ことか。また「白登圍」の略か。すなわち漢高祖が白登で匈奴の兵三十余万に包囲された故事。

71旅朝馳暮止 旅は朝馳暮止

御

72泓水滴星涵 泓は水滴星涵

節

73林剪梅灯話 林は梅灯を剪りて話る

召

74桓登芸閣諧 桓は芸閣に登りて諧す

宮

75何言溪振舌 何をか言ひて溪は舌を振ふ

竹

76幾興景堪貪 幾ばくの興ぞ景は貪るに堪えたる節

節

77杏巷送春陋 杏巷 春を送ること陋し

廣

78簪村終日酖 簪村 終日酖しむ

御

79涼揺陶起臥 涼揺ぎて陶は臥を起こす

節

80沢吟屈懷湛 沢吟ふて屈は湛らかなるを懷ふ

澗

(39) 前句の「汗血」という駿馬から、屈原「朝馳余馬兮江

皋、夕濟兮西滙」(九歌・湘夫人)を連想したか。

(40) 芸台とも、藏書の建物。前句の「林」が林逋を指すのに

対して、「桓」は後漢桓榮のこと。

(41) 廣長舌、仏の舌。蘇軾「溪声便是廣長舌、山色豈非清淨

身」(贈東林総長老)。支第四97に既出。

(42) 「簪村」は下簪のこと、下若とも。『太平御覽』「輿地志曰、南岸曰上若、北岸曰下若、乃村名也。村人取若下水以釀酒、醇美勝于雲陽」(卷六十五、若下水)。

81沙為湘澄簪 沙は湘の澄むるが為に簪ふ

雲

82暑兼秦苛焚 暑は秦苛と焚る

良

83就荒狼睡塚 荒に就きて狼は塚に睡る

御

84帶暖雀喧簷 暖を帯びて雀は簷に喧し

竹

85民稻土摩詰 民は稻土の摩詰

雲

86翁松原運庵 翁は松原の運庵

澗

87 怒潮 船鼓翼 怒潮 船は翼を鼓す 良

88 深閣鑑梳 深閣 鑑は髪を梳る 竹

89 吐哺口堯且 哺を吐きて堯を口にする且 御

90 蹟文夢郭淹 文に蹟く 郭を夢みる淹 澗

(43) 数の多いこと。『太平御覧』『魯連子曰、朝露之蒲、工女

不能治。淄澠之沙、計兒不能数』(卷七十四)。

(44) 運庵普巖。「宋湖州道場山運庵普禪師、嗣法於松源嶽禪師、授之於虛堂愚禪師」(仏学大事典)。

(45) 周公旦が人材を大事にする故事。『史記・魯周公世家』

「然我一沐三捉髮、一飯三吐哺、起以待士」。

(46) 江淹が夢で筆を贈られた故事。『太平廣記』『宣城太守濟

陽江淹少時、嘗夢人授以五色筆、故文彩俊發。後夢一丈夫、自称郭景純、謂淹曰、前借卿筆、可以見還。探懷得五色筆、与之。自爾淹文章蹟矣」(夢・梁江淹)。

91 池蓮誰色筆 池蓮は誰の色筆ぞ 良

92 爛葛祖華緘 爛葛は祖の華緘 雲

93 禪勝八珍味 禪は八珍の味に勝れり 宮

94 矩匡丈室函 矩は丈室の函を匡す 廣

95 魚抛量海尺 魚は海を量る尺を抛つ 召

96 梟覓貯家 梟は家に貯まる覓を覓む 澗

97 流涸石猶醜 流涸れて石猶醜し 竹

98 叢繁露半含 叢繁くして露半ば含む 御

99 祝釐嵩萬歳 祝釐 嵩は萬歳 節

100 共使国恩担 共に国恩をして担はしむ 雲

(47) 手紙の美称。『太平廣記』『發華緘而思飛、諷麗句而目断』(雜伝記八)。

(48) 白玉蟾詩「贈画魚者」に「状如抛尺量波練、復似穿梭擲水紋」と詠むのを踏まえているか。

(49) 梟盧、古代遊戲用語。前句の字「抛」からの連想か。李賀「何須問牛馬、抛擲任梟盧」(示弟)。

(50) 漢詩用例として歐陽脩「石醜駭溪怪、天奇瞰竜湫湫」(懷嵩樓晚飲示無党無逸)など。

(51) 武帝が嵩山に登り、吏卒が萬歳三唱を開こえたという(漢書・武帝本紀)。尤第十一・五に既出。

(よう こんほう・武蔵野大学准教授)